

推薦のことば

このたび「胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技」の改訂版が出版されることになった。本書は初版発売以来、高い評価を受けている。初学者のみならず、胆膵領域の専門家も本書によって、内視鏡手技に関する心構えを新たにした人も多いと聞いている。

内視鏡手技を利用した胆膵疾患のマネジメントは、開腹手術や鏡視下手術に匹敵するあるいは、それを凌駕する治療効果を上げるようになった。これらの治療効果の著しい向上の背景には、装置の開発とともに術者の技術の開発・向上がある。装置の面では、超音波内視鏡という、内視鏡と超音波の融合した装置の開発が大きなインパクトを与えたことは言うまでもない。2つの画像技術の融合、すなわち粘膜面の観察と、その下にある組織性状の描出が、ともにリアルタイムに実現したことが技術的なrevolutionをもたらした。

膵疾患の病理組織診断が低侵襲に行えるようになったことは、暗闇であった膵疾患に光を当て、膵臓病学に大きな進歩をもたらしたといえる。

また、従来開腹手術でしか行えなかった、消化管と、胆道系、膵管系、囊胞などとの瘻孔形成術が内視鏡手術によって低侵襲に行えるようになったことも、この領域の革新的な出来事といえる。

しかし、同時に、新しい診断・治療手技の開発は、熟練した手技が要求されることにつながり、合併症の頻度と重篤度もその手技に大きく依存することになる。

今回の改訂版では、この手技習得の上で欠かすことのできない先達の指導が、コラムを使って「生の声」として随所に書かれている。また、手技をライブのように供覧する動画も大幅に増え、本書の魅力をさらに増大させていく。

胆膵領域のみならず、内視鏡を手にして診断・治療を行う医師の必携の書として、自信を持って推薦するものである。

2012年2月

東京医科大学消化器内科 主任教授
森安史典